Ｃｒｙ　ｐｅｒ　Ｒ．

―resurgence―　予告版

激しい吐き気で、目が覚めた。

「って……」

すっかり慣れ切った、胸苦しい目覚めは、しかし今朝は新たな……よく思い出せないが、これまでにない不快感を伴っており。

「ゆ、め……？」

初めての土地の慣れない寝床で、見知らぬ天井を前にしている、金色の短い髪で尖った耳の紫の目の少年は。

一瞬、己の目が金色にきらりと光った事に気付くわけもなく。片耳に言語翻訳機である装身具を揺らし、袖が無く縦襟の、上下共にシンプルな黒衣の躰をゆっくりと起こす。

「目が覚めた？　ユーオン――いや、紫雨（しぐれ）君」

閑静で小さな城の一室、そこの主である貴賓……肩掛けを羽織り、くすんだ赤色で簡素な礼装の、長くまっすぐな茶色の髪の女性が、落ち着いた声を少年にかけてきた。

「気分はどうかしら。バカ息子の丸秘部屋を貸してあげたとはいえ、この世界自体、魔でない君には相性は悪いはずなんだけど」

「……マヤ？」

「やっぱり浮かない顔ね……どれ、熱はないかしら？」

少年が起き上がったベッドに腰掛けた女性は、鋭く端整な顔立ちながら、年の功とも言える穏やかさと平和さで少年に微笑みかけつつ、少年の額に手を当てる。

「と言っても、熱の元になるエネルギー自体、君には全く足りてなかったわね」

「……」

「精霊の助けになる自然の気は、魔界には、本当に乏しいの。せめて食事で補給しないと、せっかくこんな所まで来たのに、君はずっと寝たきりで過ごす事になるわよ？」

わかってる……と、難しい顔で俯く少年は、少し前から全く食事が摂れない状態であると、女性も当初から耳にしていた。

あくまで穏やかに、しかしいたずらっぽく微笑む女性は、
「と言っても、エネルギー源は食べ物だけじゃないわよね」
「……」
「今日はヒャクネンのコドクを出してみたわ。ストレートにする、ロックにする？」
心から嬉しげに、きらりと光るガラスの杯を手にしている女性に、たははと思わず少年も平和に苦笑うしかなく。
「マヤはいつも、朝からお酒を呑むのか？」
「嫌ね。久しぶりに相手が出来た時くらい、好きに呑ませてちょうだいな」
この城で女性と対等に話をして良い者は、客人たる少年とその養父、そしてたまに城に通い来る、女性の伴侶だけという事であり。
女性の一人息子に姿形が似るらしい少年が、唯一摂れるエネルギーを躊躇いなく勧める、文字通りの悪魔の酒豪女性だった。

荒野の一角、魔界ではごく小さい方のこの砦……少年の本来いた世界によくある、教会という建物を大きく広くしたような、少年の養父母と縁戚関係がある悪魔の隠居先の城に来る前に。
「……え。オレは、外で待ってるのか？」
「ああ。青の守護者とは二人で話させてくれ」
少年を魔界まで連れて来た養父が、それより先に立ち寄った場所――彼らが元いた世界『宝界』において、現在は世界地図の中心にある島国『ジパング』の、更に中心地である『京都』という街で。
『花の御所』という、風雅で多くの貴賓が衛兵を伴い住まう場所にいる、街の管理者の一人である公家の男を訪ねて、養父は少年と連れ立って御所の門を叩いていたのだが。

「時間も遅いし、話をややこしくしたくない」
人目を忍ぶように、予め薄暗い黄昏時に、公家を訪ねる約束を申し入れていた養父――夕空に溶けそうな暗い青系の身なりで、薄い灰色の目と、前髪の一部が黒く染まる灰色の短い髪の若い男は、門前で少年に難しい顔で言い含めていた。
「ユーオンが世話になった礼だけじゃなく、人形事件の顛末や、行方不明の黒の守護者の事も話しておかないといけないしな」
昨秋からこの仲春まで、養父母が不在の間、偶然の成り行きでこの御所に引き受けられた少年について。少年が御所から出た後にも、感謝と謝罪に上がる余裕も無い事変に、男も少年もこれまで巻き込まれており、
「ユーオンは、黒の守護者は自分が殺したと、青の守護者に言うつもりだろう」
「……」
男が会おうとしている公家も、その事変とは無関係ではなく。

「厳密には黒の守護者も死んでないわけだし、そもそも巻き込まれたのはユーオンの方だ。青の守護者の元仲間を斬ったとはいえ、その負い目をユーオンが持つ必要はない」
「……いいのかな、そんなんで」
『守護者』という、とある筋には名の知れた肩書を持つ公家の仲間で、それも『守護者』である者が関わった事変のために、そもそも少年はこの御所と縁を持つ事になっていた。
「話した方がユーオンの気は済むだろうから、俺から事の次第は話しておく」
「……」
慣れない服装――旧いジパング礼装に近い、前開きの上衣を帯で締める通称『漢服』似の身なりに長袴も下衣にした男は、少年と目を合わせて上衣の裾を押さえつつ少し屈んだ。
「子供の事は、親が責任持って当たり前だろ」日頃は無愛想でも、養子の少年やその妹には穏やかな笑顔を見せる養父は、俯く少年に、そうしてただ苦く笑いかけたのだった。

それから程無くして、御所の内へと少年と養父は迎え入れられ。
正装のようでいて旧く、袖を捲り上げたり、いかにもチグハグな異国人の養父が、少年を一時保護してくれた公家と話をしている間に。勝手知ったる場所とばかりに、少年は一人でふらりと姿を消していた。
「……やっぱり袴で来た方が、御所の色に合ってたな」
袖が無く襟の立つ黒の上衣が基本の少年は、この御所で生活した時から、黒でシンプルな長い下衣の上に、日中は紫の袴を身に着けるようになっており。
魂である剣を手放す事が出来ない少年には、その方が帯剣に便利で、そうしていたのだが……その必要はつい最近、養父の旧い仲間の助力で無くなっており。一応正装の養父とは対照的に、いかにも異国人の身なりで御所を訪れた少年だった。

上腕に留めて、背中を覆うシンプルな白いケープと、膝丈まである白い腰巻の中は黒の上下という少年は。身に着ける物は、片耳の黒い装具に、左手に腕時計のように巻かれた羽飾りと紐付きの鍵がある程度であり。
そうした身軽な恰好で、不遜にも少年は、養父を待つ間に御所の瓦の屋根の上に上がり。ちょうど赤く焼け始めていた夕空をしばらく、一人でぼけっと座って眺めていたのだが。
「……剣はどうしたのよ？　ユーオン」
「……――」
身動きせずに夕焼けを眺めて、座り込んでいた少年の元へ、物音一つ立てずに――
まるで空から降り立った鳥のように、その赤い髪の少女は自然に現れていた。
「……ツグミ」
少年はただ、懐かしい相手の名前だけを呟く。

鶫と呼ばれた、夕焼けより赤い髪の少女は、肩にぎりぎり着くかどうかの髪を、さらりとかき上げながら……気の強さと気品を備える大きな黒い目を不服そうに細め、座り込んで空を見上げる金色の髪の少年と、少し離れた所で佇んでおり。

「せっかく来てるのに、誰にも顔も見せずに帰るつもり？」

「……」

一人で夕焼けを眺めているだけだった少年に、少年が滞在した頃に剣を習っていた師の娘で、また兄弟子の従妹でもある少女は。

公家や剣の師のみならず、仲良し子供組と言えた少女、兄弟子とその弟に挨拶の一つもない少年を、薄情者と言いたげな目でじっと見つめる。

少年は無言で、穏やかな無表情の紫の目で、夕陽を背にする少女を眩しそうに見上げた。

少年がそうして無言なので、少し気づまりだったのか、少女は不機嫌そうに口を開いた。

「びっくりしたわ。ユーオンのお父様って、本当にユーオンそっくりなのね」

「……」

「ラピからそっくりとは聞いていたけど……でも、血は繋がってないのよね？」

元は少女と、少女の従兄弟の二人に、後一人仲良し組の少年が、少年の妹分と幼い頃から友達関係であり。しかしその養父に少女達は会った事がないようだった。

「……」

この少女達と顔を合わせれば、妹分の名前が話に出るのは避けられない事であり。

そのため一人、誰にも会わずに屋根の上に逃げていた少年は、穏やかに苦笑いながら、少女にようやく言葉を返した。

「ラピスもオレも、レイアスやアフィとは、全然違う生き物だと思う」

まずもって、基本ただの人間だった妹分と、かなり強い化け物である養父母と、化け物としては普段は弱小そのものの少年は。

ヒトの姿をしながらヒトならぬ力を持つ、千種を超える化け物がいるというこの世界で、それぞれ違う様相の生き物だった。

何処か覇気のない様子で答えていた少年に、少女は要領を得ない顔で腕を組みつつ、

「それは何となくわかるけど……でも、あのそっくり具合じゃ、ユーオンを新しく養子にされたのは無理ない気がするわね」

「……」

六年前に人間の幼女を養子とした後、昨春に瀕死の少年に出会うまで、新たな養子を持つ気など微塵も無かったはずの養父母の事は、少年も重々感じていた。

「ユーオンも他人の気、しないんじゃない？」

少年がそこまで養父に生き写しな事を、常々妹分は隠し子説を持ち出して少年をからかい、

「……うん。正直、ホントの親な気がする」
それは化け物の養父母と何一つ、目に見える共通点のなかった人間の妹分には羨ましくもあった事なのだろうと。
隠し子だろうと妹分にからかわれる度に、焦って否定してきた少年は無意識に、妹分の深い孤独を感じ取っていた。

ずっと苦笑いのままの少年に、首を傾げる少女からはいつの間にか、不機嫌さは跡形もなくなっており、
「ユーオンがそう言うなら、多分そうなのね」
拾われる以前の事を覚えていない記憶喪失の少年が、そこまで口にするのは余程であると、納得したように少女は頷き。
現状把握に優れる勘の良さを持つ少年を、少年がこの御所にいた頃から、おそらく一番その実態を掴んでいた――少年とは少し違う方向性の、強い感受性を持つ赤い髪の少女だった。

「ユーオン……本当に、元気無くない？」
「……」
金色の髪の少年は、基本的に穏やかな性質で元々そう喋る方ではないものの、
「……オレ、そんなに何か変わった？」
この御所で少女の近くで生活していた頃には平和な笑顔が似合った少年が、困ったような微笑みで少女を見上げる姿は……そのまま、夕暮れに溶けそうな儚さであり。
「変わったって言うか、元気無い」
「ツグミはいつも、ヒトの心配ばかりだ」
「何でよ。私そんなにいい人じゃないし」
アンタが危なっかしいだけでしょと、少女は目を逸らして怒った風だった。

「……」
少女がどうやら、少年の反応を待っているようなので、素直な思いを少年は口にする。
「誰にも、会う気はなかったけど……でも、ツグミに会いたかった」

だから嬉しいと、平和に微笑んだ少年に、
「――って、そういう事じゃなくって！」
真意の不明な直球さは相変わらずの少年に、戸惑う少女はまるで話を逸らすための勢いで、
「ずっと留守にしてたけど、そっちの問題は解決したの？　もう剣はいらないの？」
あまりに近況を語らない少年に少女の方から、訊きたかった事をようやく口にした。

「……」
少女がそれを訊かなかったのは――訊いてほしくない少年を無意識に感じていたのか、少年は少し目を伏せて話し出す。
「剣はレイアスの仲間に小さくしてもらった」
ほらと、左腕に腕時計のように巻く羽飾りの付いた鍵を見せる少年に、少女は目を丸くし、
「力で道具を携帯型にするやり方があるのは知ってるけど、見事なものね……」
最早装飾品にしか見えなくなった仕様の剣に、まじまじと感心しているようだった。

「解決って言うと――オレが誰なのか、もう探さなくても良くなった」
「え？」
「オレの宿題は終わったってさ。後はそれを、採点出来る奴を迎えにいくだけだ」
実の妹をこの世に還す事が出来た少年は、そのためだけに長い時を越えて待ち続け……現在残った問題は一つ、彼らの母たる人物が、『魔界』という仕事先から帰ってこられない状況らしい事だった。
「それならまた、何処かに出かけるの？」
「うん。いつ帰るかは、今はわからない」
養母である相手にも、実の母たる縁を強く感じていた少年は、妹にはその相手が必要と何の迷いもなく養父への同伴を決めており。
つまらなさそうに一つ、息をついた少女は、
「じゃあ、今度帰った時には……ユーオンが誰なのか、訊いてもいいの？」
赤い空を背に尋ね、少年はただ黙って頷いた。
それは幸いだったのかどうか。少年が一番話したくなかった妹分の事は、少女から話に出す事は、不自然な程にその後も全くなく。
それからは程無くして、公家と話を終えた養父と少年は合流し、少女以外の誰にも顔を見せずに花の御所を後にした。
「青の守護者はユーオンの事を心配してたよ。今度帰った時は、ゆっくり訪ねて来いとさ」
「……」
養父の淡々とした報告に、少年は目を伏せる。
「エルフィの事も、ついでに話しておいた。人形事件はもう解決した事も含めて」
「……エルは、ジュン達を襲ってるのに？」
ただの人間でありながら少年の妹は、悪魔と契約し、悪魔が宿った人形を操り動かす事が出来る特技を持っており、
「それは、あのコ自身の意志じゃないだろう」
少年がこの御所に引き受けられたきっかけは、妹が操る人形が公家の子供二人を襲う場面に出くわし、子供達に加勢したからだった。
「あのコは誰かの手伝いをしたかっただけで……悪いのはそれを利用した奴らだからな」
「……」
養父自身はわからない事としても、確かに父たる縁を感じる相手の静かな声に、少年は何故かまた顔を上げられず、俯きながら呟く。
「そんな甘いこと言ってると……レイアスは、早死にする」
彼らがこれから赴く『魔界』を思ってか、自然と表情が硬くなる少年に養父は苦く笑い、
「アフィを取戻して、ユーオンとエルフィが一人立ちするまでは――悪魔になっても今は死ねないよ」
ぽんぽんと、訳もわからず視界の滲む少年の頭を撫で叩く男は、不思議なくらい優しげな声色をしていたのだった。

既に暗くなってしまった空の下で、京都を出るために連れ立って歩きながら、彩の無い目の男は少年を横目で見て僅かに俯く。
「すまないな……ラピスがいなくなってから、ユーオン自身差し迫ってる状態なのに。その解決策も見つからない内に、魔界なんて所に連れていく事になって」
「……それは、ラピスの事とは関係ないだろ」
そうか？　と男は僅かに顔を顰める。
「オレは凄く昔から生きてる剣なんだから。とっくに寿命が尽きてておかしくないのに、ここにいる事の方が奇跡なんだ」
今は少年の正体をある程度把握した養父には、その身の窮状を少年は素直に伝える。
「忘れっぽくなったのも本当は……ラピスの影響じゃなくて、オレ自身の限界なんだし」
「……」
『忘却』という『神』を宿した養女が消える前から、消えた後もまだ様々な記憶の支障を来たしている少年に、男は強く眉を顰めた。

その後、養父の旧来の仲間が造ったという異世界へ渡る事が出来る不思議な装置を使い、紅い空の下に来た少年と養父は――
「紫雨君？　何か質問あるかしら？」
「――え？」

大きな教会のような小さな城の主、養母の義理の祖母に当たるという悪魔の女性の元を、まず養父は少年を連れて訪ねていた。
「ここから先、火撩（かりょう）君とは別行動になるけど、紫雨君は一人で大丈夫なの？」
女性から最新の情報を得た養父は、その後は単独行動をとると少年も聞いており、女性と共に養父の出立を見送りに出たのだが。
「くれぐれもユーオンのバックアップを頼む、マヤさん」
「ふふふふふ。その代わりちゃんと、うちのバカ旦那とバカ息子探してね、火撩君」
後、ちゃんと真名以外で今後は呼びなさいと、女性は養父にも少年にも言いつける。
「くれぐれも紫雨君も、悪魔や天使、神とかそういう相手には簡単に名乗っちゃだめよ。弱みを捉まれる可能性があるだけで、いい事なんて何一つ無いんだから」
「ふーん……」
「ユーオンや俺には特に、真名に意味なんて無いけどな。それでもか？」
「無いように見えてあるかもしれないでしょ。それに人間の世界ですら、魔道を学ぶ者には常識のことよ、これって」
「……じゃあ、マヤの事は何て呼ぶんだ？」
首を傾げる少年に、女性は綺麗に微笑むと、
「私はいいのよ。私程の上級悪魔になると、誇示した方が自分の力を示す事になるから」
その余裕が持てる程でなければ、名は隠せと改めて説明する女性だった。

そうしたわけで少年と養父は、滞在登録をしたジパングの登録名――養父は『檢火撩(うつぎ)』、少年は『檢紫雨』を仮の呼称としてしばらく使う事にした次第であり、

「『銀色』君は、『時雨雲英(しぐれきら)』で良いのよね？まだ会ってないけど、会えるのが楽しみだわ」

ある経緯で登録名が二つある少年は、二つの意識をそれで呼び分けようと決められていた。

昼夜の空の変化がない世界の、城の一角の広いバルコニーで、大きな四足でコウモリのような羽を生やすトカゲといった獣を横に、養父は女性と今後の相談を続ける。

「この後は紫雨君を、私からの使者として、西のアスタロト城に送ればいいんでしょ？」

「ああ。マヤさんの関係者ともなれば、早々危害を加えられる事はないと思うが……」

『飛竜』と銘打たれる、養父の力――もう一つの体だという灰色の巨獣は、少年の方をずっと心配げに見つめ続けていた。

「改めて確認するけど――アナタ達の目的は、聖魔アスタロトとして悪魔化させられ、今はアスタロト城を守る『檢流惟』……真名は、ティアリス・アースフィーユ・ナーガを元に戻して、宝界に連れ帰る事でいいのね？」

真面目な顔で言う女性に、養父は頷く。

「『アスタロト』は本来、マヤさんの旦那か息子が担うべき悪魔だ。アスタロトの適性を持つ血をひくのは、今はその二人だけだし」

「そんな事ないわよ。だから私とアナタ達が義理でも親戚になるんじゃないの」

そこで、面白くなさそうな顔を隠しもしない女性の伴侶は、元々は少年の義理の祖母の、実の父に当たり……つまりは女性は、養母の祖父の後妻に当たる関係だった。

しかも後妻とは言え、その相手と元々長くそばにいたのは女性の方で、

「あのバカの若気の至りとかで、バカの血をひくのはアースフィーユもその兄弟も一緒。フラフラ自由奔放なのはお互い様でしょ」

「……それでも、真に適性があるのは多分、アフィと、マヤさんの旦那か息子くらいだ」

わかってるわよと女性は、大人の女といった流し目で養父を一瞥するのみだった。

女性と養父曰く、『悪魔』というのは実の存在ではなく。『魔王』がそうであるように、概念として在る悪魔の力に近い力――適性を持つ者が、概念から更に力を引き出す時こそ、悪魔が現界した状態と言えるらしい。

「あの孫ちゃんが、可逆か不可逆な状態かは知らないけど、せいぜい頑張りなさい」

「……」

力を引き出すだけなら、その時にだけヒトは悪魔と成ると言うが……魔王のように役割が固定し過ぎた者は往々にして、概念に侵され、人格まで変容するのが定めだった。

「結局……問題は悪魔憑き、なのか……」

そして悪魔と成る可能性があるのは、魔族だけではないと、少年は改めて知る事になる。